

ハンカチ王子の清潔感

真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

夏の高校野球甲子園大会で優勝した早稲田実業の投手、ハンカチ王子こと斉藤佑樹君の人気には本当に驚きましたね。

何しろ、野球なんかあまり見たこともないというギャルまで、佑ちゃん佑ちゃんと騒いでいるんですから。

彼女たちに、佑ちゃんの魅力は何かと尋ねたところ、いちばん多かった答が、「クール」ということと「清潔感」ということでした。

クールというのはアメリカから輸入された言葉で、日本でもよく使われていますが、ちょっと分りにくいところのある言葉です。

それにアメリカと日本ではいくぶんニュアンスも違っているように思われます。

日本語の「清潔」という言葉も、いろんな場所でよく使われていますが、これも、分かったようで分からないところのある言葉ですね。

「清潔感がある」などと言われますと、「そうだね、清潔感があるね」とうなずいて、それで何となく分かったような気になってしまいます。

こういう、判ったような気にさせる言葉って、意外に多いんですよ。私たちは、たいていのことはこういう言葉で間に合わせているんです。

でも、清潔感って何？ 何を清潔と呼んでるの？ などと問われますと、どう答えてよいのか分からなくなってしまうのも確かです。

清潔感があるっていうのは、いったいどんな感じなのでしょう。

いちばん近いところと言えば、斉藤君と最後まで投げ合った、あの駒大苫小牧高校の田中将大君には清潔感はないっていうのでしょうか。

それとも、清潔感はあるけれど、斉藤君には劣る、ということでしょうか。

そうすると、清潔感があるというのは、色白だということになってしまいますね。

斉藤君と田中君を並べてみると、真っ先に目につくのは、色が白いか黒いかの違いぐらいじゃないですか？

でも、それは、日に焼けにくい皮膚と焼けやすい皮膚の違いが出ただけだと言えますよね。そんなことで差を付けられたらたまらない、と田中君は言うでしょう。

夏の日射しから皮膚の「清潔感」を守りましょう、などという日焼け止めの宣伝でもないかぎり、清潔感＝色白などという公式は成り立ちません。

日焼けしている方が健康的だ、という考え方もあります。こんがり焼けた肌の色に健康美があるのだとしたら、清潔感はいったいどちらにあるのでしょうか。

それに、色白イコール清潔などという考え方をしていると、差別だと言われかねませんから、注意が必要です。

大リーグの選手たちの前でそんなことを口にしたら大変ですよ。黒人選手たちは間違いなく怒り出すでしょう。

でも、こんなことはもう少し気楽に考えましょう。洗い立てで純白なシャツと、垢だらけで黒ずんだシャツがあることにします。

洗い立てのシャツは、黒ずんだシャツよりも清潔感がある、ぐらいいい感じで話をすればいいんです。

女性ファンにとって、佑ちゃんの顔は、いつも洗い立てのシャツのように見えたのかも知れませんね。

そう言えば、早稲田カラーと言われる、あの真っ白なユニフォームの影響もバカにはなりませんよ。衣服の清潔感、時には人間を作り替えてしまうんです。

田中君が早稲田実業のユニフォームを着ていたら、どんなふうに見えたでしょうね。

ハンカチ王子などというニックネームが付けられたように、試合中の佑ちゃんは、時々ハンカチを取り出しては顔を拭いていました。

ファンは、そんな仕草に清潔好きのイメージを見て、それを清潔感という言葉で言い表したのかも知れません。

しかし、そうなると、色白ならば誰でも清潔感があるというわけではなく、それ以外の何かが必要だということになります。

色白プラスアルファということですが、まず何よりも本人がキレイ好きでなければなりません。

ハンカチでさかんに顔を拭いたりするキレイ好きな人間に、人々は、特に女性は、或る種の清潔感を覚えるのでしょう。

いや、それは違う、とあなたは言うかも知れませんね。本人が清潔好きだということよりも、顔立ちの良さが問題だ。

いくら洗い立てのシャツのような顔をしていても、八方破れのご面相では、人はあまり褒めてはくれませんよ、と。

確かに、そう言われてみると、顔立ちの良さということが清潔感と関係があるようにも思えてきます。

佑ちゃんには清潔感がある、という女性ファンの声は、結局、佑ちゃんがイイ男だ、男前だということを知りたいのでしょうか。

でも、こうなると、清潔感と言った時の「清潔」が何を意味するのかますます分からなくなりますね。

清潔感のある顔というのは、必ずしも美形を意味するわけではないでしょう。

顔立ちがスッキリしていて、イヤミがない顔、輪郭の整った端正な顔だったら、誰だって「清潔」と呼ばれてもよいはずですよ。

どうして、特に佑ちゃんなんだ、と、またまた田中君が怒るかも知れませんね。

私は、清潔感ということを考える時、必ず思い出すのは、現在ヤンキースで活躍しているジョニー・デーモン選手のことです。

彼がレッドソックスにいた頃は、髭面と長い髪の毛で有名でした。みんなから「原始人」と呼ばれていたように、毛むくじゃらで、いかにも野蛮な感じでした。

それが、チームカラーの異なるヤンキースに移籍したとたんに、髭を剃り、髪を刈り、スッキリした顔に変わってしまいました。

つまり、清潔感のある顔に一変したのです。

この場合、デーモンの顔立ちが良くなったとか、色白で端正な顔を取り戻したというようなことが問題なのではありません。

むさ苦しい髭や髪を切り落とし、顔の整理がついたということに、清潔感が感じられるのです。

ところが、ブログ (Elastic) などを読みますと、女性の中には、むしろ髭面のほうに清潔感や「爽やかさ」を感じると言う人もいますよ。

これはこれで判るような気もするのですが、髭面の下地がひどかったら、そうも言ってはいられないのではないかと思うんです。

このように色々考えてみますと、「清潔」という言葉の意味が非常に曖昧で、考えれば考えるほど、かえって判らなくなってしまうというのが実情です。

結局、斉藤佑樹選手に清潔感があると言った人たち、とりわけ女性たちは、この言葉で何を言いたかったのでしょうか。

それは、おそらく、清潔とかキレイといった本来のかしこまった意味を離れて、もっと単純に「いい感じ」といったところではないでしょうか。

ところが、このように「いい感じ」という単純な意味で使われているのだとすると、それは、クールという言葉とほとんど同じ意味になってしまいます。

特に、アメリカの若者たちが使うクールに近く、「良い」とか「好き」といった意味、すなわちグッド (good) の意味です。

グッドだ、いい感じだ、カッコいい、好きだ、などという、ほとんど感嘆詞に近い使い方だと言えましょう。

ただ、クールのほうには、もう少し異なるニュアンスがあって、「冷めている」「落ち着いている」「物に動じない」といった意味もあります。

この辺は、「清潔感がある」という言い方とはかなり違ってきます。

佑ちゃんのクールさが良いと言った人たちは、無口であまり喜怒哀楽の感情を見せない、ピンチになっても落ち着いている彼の姿にクールさを感じたのでしょう。

しかしスポーツ選手のイメージというのは、たいていそんなふうには、口数が少なくあまり喋らない、感情の起伏を見せないといった感じなのではないでしょうか。

というのも、観客と選手の間にはいつも距離があって、彼らの肉声が直接届くことはめったに無いからです。

実は「清潔感がある」とか「クール」などと言われて、現代的な魅力の最先端にあると思われる佑ちゃん型タイプは、昔の高校野球には意外と多かったのです。

とりわけ、投手はポーカークフェイスでなければダメだと言われた時代がありました。ピンチになっても、まったく動揺を見せない、喜怒哀楽を表に出さず、ただ無言のまま、黙々と投げるピッチャーが理想化されました。

その意味で、色々な表情を見せる田中将大君よりも、佑ちゃんのほうがはるかにクラシックだったと言えます。

早稲田実業の白を基調にしたユニフォームもそれに合っていました。昔の高校野球には、このスタイルが多かったのです。

佑ちゃんは、まるでタイム・スリップしてきたようにクラシックでした。

それを強く感じさせたのは、優勝の瞬間、突然泣き出した佑ちゃんを見た時です。

面白いことに、それまで笑ったり、泣き出しそうな顔をしたり、さかんに感情表現を見せていた田中君のほうは、敗戦のあとは涙一つ見せなかった。

仲間たちが声をあげて泣いている時でも、彼は超然としていた。彼のほうがはるかに現代的で、クールな感じでした。

昔の高校野球のヒーローは、むしろ佑ちゃん型だったと言えます。

試合中は能面のような顔をして、感情をあまり表には出さないで、一生懸命に戦っていた選手が、栄光をつかんだとたんに一挙に感情的になってしまいます。

もうクールなどと言えるようなものではありません。ウェットもいいところです。

佑ちゃんの先輩たち、王貞治しかり、荒木大輔しかりです。

闘争心の無いスポーツ選手などいないでしょうが、それをむき出しにする者よりも、むしろ内に秘めていて、表面的には落ち着いている者がクールだと言われます。

ところが、それは、遠くから見ている観客にとってそうなのであって、そばに近寄ってでなければ見えないことも沢山あります。

甲子園でのライバル同士がアメリカへ遠征することになり、一緒に練習を始めた時、あの田中君できえ、佑ちゃんがよく笑うと言って驚いていたくらいでした。

ベンチと一緒に入れば、互いの肉声も響いてきますので、相手が意外にアガリ症だとか、顔に似合わずカッカしているとか、細かい人間性も色々と見えてきます。

両親や兄弟から見れば、佑ちゃんは、人が思っているほどクールではないかも知れません。

優勝が決定した瞬間、涙を流し始めた佑ちゃんを見たファンも、そこに意外にウェットな側面を見たと思ったかも知れません。

清潔という言葉がクールという言葉よりも奥深いと思うのは、クールという言葉が使えなくなったあとでも、「清潔感がある」という言葉は充分通用するからです。

泣こうが、喚こうが、サッカー選手のように喜怒哀楽まる出しで狂喜乱舞しようが、「清潔感がある」と思えば、思えないわけではありません。

ジダンの頭突きにさえ、清潔感を感じる人がいるのですから。

普通はクールという言葉が使えないような場面でも、清潔という言葉は使えます。

自分が「いい感じ」だと思ったものは何でも、「清潔感がある」という一言で片づけることができます。

それで周囲の人間も、何となく分かったような気になるのですから、非常に便利な言葉だと言えます。

佑ちゃんに清潔感があるというのなら、他の選手たちには清潔感が無いのでしょうか。

私に言わせれば、田中将大君にだって同等の清潔感がありますし、一つの目的に向かって全身全霊を傾けている高校球児全部に清潔感があります。

不潔な者などひとりもいません。つまり、みんながみんな「いい感じ」です。

それでは、佑ちゃんには清潔感があるというファンの言葉は、どう解釈したら良いのでしょうか。

結局、佑ちゃんが好きだということなんです。佑ちゃんには特別に惹かれるものがある。特別にいい感じがある。

そういったファンの選り好みの感情、一種の恋愛感情に近いものを代弁するために、「清潔感がある」と言っているに過ぎません。

清潔という言葉がこのように、単純に「いい感じ」という意味で使われるということは、清潔願望が人間の基本的な欲求であることの証となります。

人間の求めている究極のものが清潔にほかなりません。

クールという言葉の示すグッドよりも、もっと深い所に清潔のグッドがあります。グッドのグッドを示すのが、清潔の意味するグッドにほかなりません。

もう少し判りやすく説明しましょう。私たちは善と悪を区別しています。しかし、善はなぜ善なのか、悪はなぜ悪なのかあまり考えようとはしません。

人を愛することは善で、人を憎むことは悪だ、とあなたは言うでしょう。しかし、なぜそれが善で、それが悪なのでしょう。

人を愛することと憎むことの違いを言えと言ってるわけではありません。なぜ、片方を善と感じ、片方を悪と感じるのか、ということなんです。

それは、私たちが善は善であること、悪は悪であることを直感しているからです。つまり、グッドはグッドだということを最初から知っています。

その直感が清潔の意識だと言ったら、あなたは驚くでしょうか。善は「いい感じ」なんです。善と聞くだけでも「いい感じ」です。

だから、「善を求めよ」などと言われると、その善がどんなものなのか内容が分からなくても、その気になってしまいます。

ところが、映画の中で、格好いいナラズ者が、悪い事をいろいろカッコ良くやっていたら、だんだんそれが善のように思えてきませんか。

「悪を求める」ことがいつの間にか善に転化して、「いい感じ」になってしまいます。

人を憎むことは善である、という論理を作り出すのが戦争です。敵国人ならば、という条件がつきますが。

敵国人をやっつけることは「いい感じ」なんです。そのために自分が戦死するのはカッコ良いと

ということになります。

善をキレイと感じさせ、悪をキタナイと感じさせるものが清潔感ですが、清潔感とは、逆に、キレイなものを善と感じさせ、キタナイものを悪と感じさせます。

あなたが佑ちゃんの内に見いだした愛すべきものを、キレイと感じさせるのがこの清潔感です。この清潔感が作り出す「いい感じ」が、あなたが選んだ愛すべきものの真実を、それが善であることを確信させます。

むずかしい言い方をしますと、人間のあらゆる価値判断に先立って清潔・不潔の直感がある、キレイ・キタナイの直感がある、というのが私の基本的な考えです。

そこで、考えてほしいと思います。「清潔感がある」という言葉だけで分かってしまわないで、そもそも清潔とは何だろうと。

これは、みんなで一緒に考え、一緒に語り合わないといけないことだと言えます。なぜなら、清潔感とは各人各様だから。

佑ちゃんに清潔感を感じる者もいれば、田中君を感じる者もいます。なぜでしょう。これだけでも、各人の愛すべきものの意味が変わってしまうんです。

善悪の意味でさえ、各人の清潔の意識で変わってしまいます。だから「清潔の哲学」を求めるとしたら、独りではとうていできるものではありません。

みんなで一緒に求めなければならない問題です。みんなで一緒に語り合い、知恵を出し合わなければ書けない哲学だと言えます。

そこで、私は、清潔クラブというネット上の集まりを作って、同好の友を求めることにしました。

私は、『清潔マニアの快的人生—永遠のキレイを求めて—』（ビワコ・エディション版 123 頁）という本の中で、

「清潔な人生、清潔な企業、清潔な社会、清潔な国家、清潔な世界、そして清潔な宇宙。人間の文化が求めるものは、これ以外にあるだろうか」と書きました。

新しく首相に就任した安倍晋三氏は、その所信演説で「美しい国、日本」を目指すという決意を語りました。

美しい国とは、清潔な国家にほかなりません。この理想を実現できるのは清潔な政治家だけです。ハンカチ王子ならぬハンカチ首相の公約を期待しましょう。

このように、究極の原理であり、究極の目標である「清潔」の意味を知ろうとすることは、これまでの哲学が知らなかった哲学です。

哲学の根底にある直感の意味を知ろうとする、いわば哲学の哲学と言えます。

日本人は、伝統的に「清潔」を重視する民族でした。ケガレの思想は、日本古来のものであり、清潔志向の強い日本人を育ててきました。

清潔の哲学は、そのような日本人にふさわしい思考の道であり、わずかな天才ではなく、民衆全体が語り合い、批判し合って実現する道だと言えます。

そして、これはいずれ、日本人が世界で最も哲学的な民族であることを証明する道にもなると私は確信しております。

私たちは、自分たちの哲学にもっと自信を持たなければならないと言えるでしょう。なぜなら清潔好きな国民なのだから。

そして、フロイトも言うように、清潔はあらゆる文化のバロメータなのだから。

【後日談】

兵庫国体高校野球の準決勝で、佑ちゃんは久し振りにハンカチを取り出して顔の汗を拭い、ファンの大喝采を浴びました。

試合後のインタビューで、佑ちゃんは、「いちどファンサービスをしておこうと思って、ハンカチを使いました」と答えていました。

このニュース番組を担当していたMアナウンサーとゲストの女優Fさんは、思わず言ってしまったようです。

「だいぶ社会慣れしてきましたね」とMアナウンサー。「ヨゴレてしまったわね」と女優のFさん。

清潔感の意味がもう一つあることが明らかになりました。

「世間の埃にまみれていない」という意味です。「初々しさ」を失わず、いつまでもキレイでいてほしいというのが、ファンの気持ちなのでしょう。

後日談は、これだけにしておく積もりだったのが、もう一つ増えました。

10月28日に始まる六大学野球リーグ戦の始球式を、なんと佑ちゃんにやらせようという計画があるそうです。

これまでに始球式をやったのは、大沢啓二とか藤田元司という、球界で業績を残した人ばかりです。

佑ちゃんへの人気を盛り上げたのは、昔の高校野球へのレトロっぽい愛惜の念もあったと思います。

でも、以前だったら、いくら高校野球のヒーローでも、大学の野球部に入って最初にやることは球拾いですよ。それが修行の道でした。

世間の大人たちは、佑ちゃんに埃をかぶせないようにしてほしいですね。

最後にもう一言。この始球式の話は、どうやら企画だけで終わったようです。やっぱり大人たちは賢明だった。

[2006/11/21 magmag]